

こどもミュージカルしんらんさま

京都（比叡山）編



【場面Ⅰ】 BGM♪「比叡山での修行」

(ナレーション)

親鸞さまは、慈円さまのもとでお坊さんになるための「得度式」を受けて範宴という名前をもらわれた後、京都の比叡山で、毎日学問や修行に励んでおられました。

けれども、学べば学ぶほどに、修行を重ねれば重ねるほどに、色々な迷いが次々とわき起こり、悩みはますます深まるばかりでした。

《登場人物： 範宴(親鸞さま)・僧侶(兄弟子)①②③》

・範宴:兄弟子、都の町で暮らす人たちも、みんな仏さまによって救われるのでしょうか。

・僧侶①:すべての人が救われるのが、仏さまの教えだ。

・範宴:では、いつどのようにして救われるのでしょうか。

・僧侶②:範宴は、いつもそんなことばかり聞くな。

・僧侶③:日頃から学んでいるだろう。修行をしない者が救われることは難しい。

・僧侶①:だからこそ、我々がしっかりと修行して、人々を救わねばならないのだ。

・範宴:では、私たちはどのようにして救われるのでしょうか。

・僧侶②:そんなことは、決まっているではないか。

・僧侶③:修行をして、悟りを開くのだ。

・範宴:では、兄弟子達は、もう悟りを開かれたのですか。

・僧侶①:それは……、まだだ。

・僧侶②:だからこうして、修行に励んでいるのだ。

・僧侶③:では、今日はこれから「無言の行」を始める!

・僧侶①:ローソクの火が消えるまで、話をしてはならない!

…… 四人は、蠟燭を前にして座る … 突然、蠟燭の火が消えてしまう

・範宴:あっ、ローソクの火が消えました!

・僧侶①:範宴、「無言の行」の最中だ。声を出してはならない。

・僧侶②:これ、注意をするのもダメだ!

・僧侶③:結局、しゃべらなかったのは、私だけだ!

・僧侶①②:えっ…(一斉に僧侶③を凝視)。

・範宴:都の人を救えるのは、いったい、いつのことになるのでしょうか。

・僧侶①②③:う〜ん…、まだ先のことだろうな。

【場面 2】 BGM♪「お山の掟」

(ナレーション)

ある日のこと、範宴と兄弟子たちは、京都の町から比叡山に帰る途中、二人の女の人から呼び止められました。

《登場人物： 範宴・僧侶(兄弟子)①②③・女性①②》

- ・女性①：あの～、お坊さま方は、今からお山に帰られるのですか。
- ・僧侶①：はい、そうです。
- ・女性②：では、私たちも一緒に連れて行ってください。
- ・僧侶②：それはダメです！
- ・女性①：どうしてダメなのですか？
- ・僧侶③：お山には「女の人が入ってはいけない」というきまりがあるからです。
- ・女性②：では、このお山には女の鳥や獣はいないのですか？
- ・範宴：それは…、いると思います。
- ・女性①：だったら、私たちも入れてください。
- ・僧侶①：きまりを破るわけにはいきません。
- ・僧侶②：そうです。勝手にお連れてしては、私たちが叱られます。
- ・女性②：どうしてもダメなのですか？
- ・僧侶③：ダメなものは、ダメです！
- ・女性①：仏さまは、女的人是救われないのですか？
- ・女性②：私たちは、見捨てられているのですか？
- ・範宴：仏さまは、すべてのものを救われます。
- ・僧侶①：だから、人々を救うため私たちが修行をしているのです。
- ・女性①：では、みなさまは、もう悟りを開かれたのですか？
- ・僧侶②：それは…、まだです。
- ・僧侶③：でも、毎日修行に励んでいます。
- ・範宴：ですから、もう少し待っていてください。
- ・女性①：そうですか…。
- ・女性②：わかりました。

♪挿入歌「迷いは消えない」

修行を重ねても迷いは消えない これでは誰一人 救えはしない
誰もが救われる道はないのか この身このままで すべての人が…

【場面3】 BGM♪「六角堂参籠」

(ナレーション)

その後、範宴は「誰もが等しく救われるには、どうすればよいのだろう」という悩みを解決するため、奈良のお寺にも足を運んで広く仏さまの教えを学びました。

そうしているうちに、お坊さんになって早くも20年近くの年月が過ぎていました。

それでも、迷いは消えないばかりか、いよいよ深まるばかりでした。そこで、聖徳太子に縁のある六角堂に百日間お詣りして、自分の進むべき道を求めることにしました。

《登場人物： 範宴・救世観音菩薩》

・範宴: 仏さまの教えによって、人々を導かれた聖徳太子さま。

どうか、これから私の進むべき道をお示ください。

(ナレーション)

六角堂にお参りを始めてから、95日目のことです。

夢の中で範宴の前に白い衣を着た方が現れ、やさしく語りかけてこられました。

六角堂の御本尊、救世観音菩薩が、範宴の願いに応えて姿を現されたのです。

・救世観音: 行者よ!

・範宴: ああ、あなたは!

・救世観音: 行者よ、迷うことなく、信じる道を求めて進みなさい。

もし、あなたがそれを「一人で成し遂げることができない」というのであれば、
私があなたの大切な人となって生活を共にし、すべての人が等しく救われる
み仏の国に導きましょう。

・範宴: すべての人が等しく救われる道…。

・救世観音: だから安心して世の人々のために力を尽くしなさい。

それがあなたの進むべき道です。

・範宴: 分かりました(合掌)。ありがとうございます(礼拝)。

そうか。もう、迷うこともおそれることもない…。

♪挿入歌「この道を行けば」

この道を行けば かならず光が この身を照らして護ってくれと
信じてひたすら 歩いて行こう 迷うこともおそれることも もうない

【場面4】 BGM♪「吉水入室」

(ナレーション)

範宴は、京都東山のふもと吉水の地で、誰もが等しく救われるお念仏の教えを説いておられた法然聖人のもとに向かいました。

《登場人物： 範宴・法然聖人・筑前（恵信尼）・女性信者（まつ）》

— 筑前と女性信者が、庭にいるところに範宴が入って来る

- ・範宴:こんにちは。
- ・筑前:何かご用でしょうか。
- ・範宴:私は範宴といいます。法然聖人をたずねて参りました。
- ・まつ:法然さまに会いにこられたのですね。
- ・範宴:はい。そうです。
- ・筑前:法然さま、法然さま～。

— 少し、間を置く

- ・法然聖人:筑前さん、どうかなさいましたか。
- ・筑前:はい。法然さま、お客さまです。
- ・範宴:法然さま…。私は範宴と申します。
- ・法然聖人:範宴殿ですか。
- ・範宴:はい。私は 20 年間、比叡のお山で仏さまの教えを学んできました。
- ・まつ:法然さまもですよ。
- ・範宴:知っています。「智慧第一」と讃えられていたとか…。
- ・法然聖人:もう昔のことです。
- ・範宴:私は、これまで教えを学び続けてきましたが、悟りを得られないばかりか、
いよいよ迷いが深まるばかりです。
- ・法然聖人:ひたすら、仏さまの教えを学んでこられたのですね。
- ・範宴:けれども、どうしても悟りに至ることができません。
- ・法然聖人:確かに、末法の世で悟ることは難しいものです。
- ・範宴:心の中は、まるで暗い雲に覆われているみたいです。
- ・法然聖人:では範宴殿、しばらく私と一緒にここでお念仏の教えを聞いてみませんか。
- ・範宴:私も…、よろしいのでしょうか。
- ・法然聖人:もちろんです。
- ・範宴:ありがとうございます。
- ・筑前・まつ:良かったですね。範宴さま。
- ・範宴:はい。よろしくお願いします。

【場面5】 BGM♪「聞法の日々」

(ナレーション)

それから範宴は、百日間、法然聖人のもとに毎日教えを聞きに通い続けました。

そんなある日のこと。今日も、法然聖人のもとには、人々がお念仏の教えを聴きに来ていました。

《登場人物： 範宴・法然聖人・筑前・まつ・町の人①②・侍・弟子①②》

・筑前：法然さま、今日も町のみなさまが、お話を聴くために集まっておられます。

・まつ：お侍さまも来ておられますよ。

・法然聖人：みなさま、本日はようこそおいでくださいました。

・町の人①：法然さま。私は一日中働いています。

それで、家に帰ると疲れているのですぐに眠くなり、

なかなかお念仏を称えることができません。

・法然聖人：では、眠い時にはお眠りなさい。

そして、目が覚めたときや気が付いたときにお念仏申してください。

・町の人①：はい、わかりました。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。

・町の人②：法然さま。私は、すぐに腹が立ったり、人をうらやんだりねたんだりしてしまいます。

こんな愚かな私でも救われるのでしょうか。

・法然聖人：自分の愚かさを知ることができたのも、お念仏のおかげです。

そのままの心で、お念仏申してください。

・町の人②：ありがとうございます。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。

・侍：法然さま。私は多くの戦（いくさ）で、何人もの命を奪ってきました。

このままでは、地獄に行くしかないのでしょうか。

・法然聖人：戦ともなれば、そのようなこともありましよう。

けれども、あなたは今そのことを深く悔いておられます。

・侍：はい。とても罪深いことをしてしまいました。

・法然聖人：そのような人こそ、阿弥陀さまは救いの目当てとしておられるのです。

そのことを喜び、お念仏申してください。

・侍：ありがたいことです。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。

・範宴：法然さま。天親菩薩様は「阿弥陀さまの光は十方を尽くす」といわれますが、
本当でしょうか。

・法然聖人：本当です。

・町の人①：では、世界中をまわって確かめられたのでしょうか。

・法然聖人：光から一番遠いところにいるのが、愚かなこの私です。

その私をいま、お念仏の光が照らしていただきます。

・範宴：それは、誰もが光に照らされるということですね。

・町の人②：私のような者にも、阿弥陀さまの光は届くのですね。

・法然聖人：はい。その通りです。

・侍：けれども、私には阿弥陀さまの光を見ることはできません。

- ・法然聖人：でも、光に照らされて、わが身を見ることはできます。
- ・範宴：私が自分の愚かさに気づいたのは、阿弥陀さまが照らしてくださるからです。
- ・法然聖人：阿弥陀さまは、飽きることなく、つねに私を照らし続けていてくださいます。
- ・全員：南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。

♪挿入歌「私のままで」

誰もがこの身のまま 救われる教えなら こんな私でも 歩いて行ける
 悩みも悲しみも すべて抱えて 私が私のままで 輝いて行ける

【場面6】 BGM♪「慈円さまとの別れ」

(ナレーション)

範宴は、比叡山をおりて法然聖人のもとに弟子入りすることにしました。
 けれども、一つだけ気がかりなことがありました。
 それは、お坊さんになってから導いてくださった慈円さまのものを離れてしまうことでした。

《 登場人物： 範宴・慈円・僧侶①②③ 》

- ・弟子①：お師匠さま、範宴が来ています。
- ・慈円：範宴か…、通しなさい。
- ・範宴：慈円さま、今日はお別れのご挨拶に参りました。
- ・慈円：範宴よ、しばらく六角堂にこもっていたと聞きましたが…。
- ・範宴：はい。九十五日目の夜明けに観音さまから夢のお告げを授かりました。
- ・慈円：観音さまからお告げを頂いたのですか。
- ・範宴：はい。
- ・弟子②：範宴、それで今度は奈良にでも学びに行くことにしたのか。
- ・弟子③：それならお別れではなく、旅立ちの挨拶ではないのか。
- ・範宴：そうではありません。法然聖人のもとに弟子入りするのです。
- ・慈円：山を下りて、吉水に行くのですか。
- ・範宴：はい。本当に申し訳ありません。
- ・弟子①：範宴！ 慈円さまにお育ていただいたご恩を忘れたのか!?
- ・弟子②：これまで多くのことを学ばせていただいたではないか!
- ・範宴：はい…。その通りです。慈円さまには本当によくしていただきました。
- ・弟子③：それなのに、慈円さまのものを離れてしまうのか。
- ・範宴：慈円さま、どうかお許してください。
- ・慈円：範宴よ、何も謝ることはありませんよ。
- ・範宴：でも、私は…。
- ・慈円：自分の信じる道を見つけたから行くことにしたのでしょう。
- ・範宴：はい…。でも…。
- ・慈円：私は、範宴が自分の進むべき道を見つけ出したことを嬉しく思います。
- ・範宴：慈円さま、本当にありがとうございます。これまでのご恩は決して忘れません。

(ナレーション)

こうして範宴は、慈円さまに別れを告げて吉水の法然聖人の弟子になりました。
 それは、お坊さんになってから20年目、29歳のときのことでした。

🎵 挿入歌「忘れないで」(全員で歌う)

一番ダメなことは 何もしようとせずに
自分にはできないと すぐにあきらめること
うまくできなくたって それはしくじりじゃない
違う方法一つ 見つけただけのこと
人に言えないような 悩み抱えたとき
ふと挫けそうに なったときには
思い出して いつのときにも
君のこと 照らしてる光があることを
顔をあげて見上げるんだ
何度でも立ち上がれ 勇気を出して
忘れないで

自分の思うようにならないことがあると
違ふと口にしたり見ようとしなから
少しの物音に 目覚めるような夜は
不安で眠れないこともあるよね
涙こぼれそうな孤独感じたとき
心折れそうになったときには
思い出して いつのときにも
君のこと 包み込む光があることを
前を向いて踏み出すんだ
何度でも立ち上がれ 君ならできる
忘れないで